



塵々集

池田 彌三郎

雪華社版

塵々集

◎ 一九六六

昭和四十一年六月二十日 印刷
昭和四十一年六月二十五日 発行

著者 池田 彌三郎

発行者 栗林 茂

印刷 日本製版株式会社

発行所 株式会社
雪華社

東京都中央区京橋一ノ七
振替 東京四二一五〇

定価 四五〇円

塵々集・目次

天の部	セ
太陽・その他	
太陽	ハ
星	一〇
風	二三
雪	二五
春・その他	
大晦日	二八
春	二〇
睦月	三三
新正一本	三三
暦	二七
理科年表	三〇

天一天上	三
大安	三四
巳歳	三六
丙午	三八
地の部	四三
山・その他	
山	四四
富士山	四六
噴火	四九
川	五二
渡し船	五三
波	五五
野	五八

木・その他	六
木	六
梅	三
福寿草	五
帰巢本能	六
鶯	七
大和・その他	
大和	三
伊香保	五
温泉	七
道	八
境	三
道祖神	四

江戸・その他	
町名	七
江戸	八
江戸前	九
東京	四
日本橋	六
涙橋	六
人の部	三
帝・その他	
帝	四
妹背	六
十七	九
巡査	二

悪友	二四
倶楽部	二六
車夫	二八
人力車	三〇
結婚式・その他	
司会者	三三
成人式	三五
祝辞	三七
結婚式	三九
デコレーション・ケーキ	三三
告別式	三四
パーティー	三六
講演会	三八

主権者	四一
五十歳・その他	
母校	四四
有名校	四六
五十歳	四八
賀の祝	五〇
病氣	五二
形見	五五
火事	五七
見舞	五九
解剖	六一
眼球銀行	六四
襲名	六六

初夢・その他	一六九
初夢	一六九
年賀状	一七一
万葉集	一七四
百人一首	一七六
俳句	一七八
いろはガルト	一八二
年忘れ	一八四
魂祭	一八六
朝目・その他	
朝目	一八八
夢	一九二
夢占	一九四

うらない	一九六
睡魔	一九八
うそ・その他	
アンケート	二〇二
うそ	二〇三
孝	二〇六
計算	二〇八
数字	二一〇
価格	二一三
謝礼・その他	
謝礼	二一六
全集	二一八
漱石・鷗外	二二〇

天
の
部

太陽・その他

太陽

蜀の国の犬は日に向って吠える、という。中国大陆の奥地である蜀は、山が高く霧が深く、太陽が姿を表すことが少ないので、たまに太陽が顔をのぞかせると、蜀の国の犬は異様なものを見たというわけで吠えたてるのだという。

それに対して呉の国は暑さの烈しい国なので、呉の国の牛は、夕方になって月が昇ってくるのを見ても、また日が昇って来てそれに照りつけられるのかと思つて、またあえぐ、という。これが、

蜀犬日に吠え、呉牛月に喘ぐ。
という文句の来歴である。

こんなことから想像するのだが、太陽を男性とし、太陽を意味する語を男性名詞としている民族は、南方系統であり、それに対して、太陽を女性とし、太陽を意味する語を女性名詞としている民族は、北方系統である、という証明はなされないだろうか。

もつとも、右の推測は、肝心な日本の場合には、ぴたりとはいかないようである。

稲という植物は亜熱帯地域のものだから、それを持つてやって来た大和民族の祖先は、南方系統ということになるのに、日本神話での太陽である天照大神は、おおひるめと言われて、女神である。だとすれば、南方系統の、稲の民族が、太陽を女性としていたことになって、右の推定はすぐ崩れてしまう。

ところが、太陽を指していると思われる天照大神は、はたして女神だろうか。

おおひるめのおおは、相対的な接頭語であつて、ほかにわかひるめという女神もいる。だからこの神の名の中心はひるめである。そしてひるめとは、日の神の妻ということだ。そうすると、おおひるめという神の名から想像されることは、この神の夫である、日の神がいたはずである。そうすると、大和民族は、太陽を女性と考えていた、などとは、簡単には言えないのである。

女性である日の神の妻の背後に、男性である日の神が厳然とひかえていた。そしてその男の神の名が、本来、天照大神だった、という想像も成立する。ひるめは、日の神に仕える巫女（まじむすめ）であり

同時に日の神の妻の位置にすわっていた神であった。

人間との関係では、神のことは人間のことばに翻訳してこれを伝える巫女が、直接に面前にでてくる。従って、男の神は、その巫女の陰にかくれてしまう、ということも多かった。それが本来、男の神の名であった天照大神という神名が、その男の神の意志を伝える巫女の名となつてしまった、という事情が考えられるようである。

大和民族が持ち伝えて来た考えでは、もとは、天照大神、すなわち日の神、すなわち太陽は、男であつた。

それが、大和民族が次第に北進して、稲が熱帯植物から次第に亜熱帯、温帯でも育成するように改良されていくにつれて、いかにも太陽が滋母のごとき恵みをたれるように思われ、女性と考えられるようになっていった。

星

わたしの学んだ小学校は、東京銀座の泰明尋常小学校であつた。戦後『君の名は』で、東京名所になつた数寄屋橋のかたわらにある学校である。その泰明の校章が、どういふわけか星であつ

て、男生徒の帽子の徽章は、星に「泰」という字を浮き出しにしていた。

校歌も星が歌われていて、終りの処に、

思えば、暗き夜を照らす

み空の星は われらの鏡

という文句が繰り返されていた。しかし、六年間学んでいたあいだに、特に、星をかがみとするという訓話などもなかったし、泰明と星との因縁、校歌校章の由来なども、聞いた覚えはなかった。つまり、公立の学校では、特にその一校についての指導原理などは、掲げられることはなかったのだろう。

ここにこんなことをいうのは、「星」をもって、「われらががみ」だとする考えは、いかにも西欧的で、明治調の文明開花の匂いがしきりにするからである。それほど、日本人の長い間の歴史は、星との縁は薄かったように思う。

星が、ロマンチックな思慕を寄せられるようになったのは、それこそ明治詩歌壇に、星菫派と言われる、少女趣味的文芸がおこってからの以後のことであろう。

『明星』続いて『スバル』と、星を名とする雑誌が出たことなどが、大きく影響しているのだろう。

与謝野晶子の有名な『乱れ髪』は、星の歌をもって始まっている。

夜の帳に、ささめきつきし星の今を、下界の人の 鬢のほつれよ

難解な歌でも有名だが、しかしよそよそしい軽薄さがあって、星にとって、少しも名誉になる歌ではない。晶子は後年これを改作して、

夜の帳に、ささめきあまき星もゐむ。下界の人は ものをこそ思へ

とした。これならわかるけれども、評判倒れの歌であることはたしかだろう。

星については、古代人は、むしろおそれをもっていたようだ。神代の神々の中に、

星の神、かがせを。

というのが、前後の關係なしにポツンとでて来る。大国主命が服従した後に、しまいまで、高天が原の神に反抗した神であつて、その経歴に、何となく印象の暗い背景を感じさせる神だ。そしてそれは、星に対するある種の恐怖を反映しているのではないかと思う。

流れ星、むかしの言い方では夜這い星という星は、縁起の悪い星だとされていて、すばる星とひと星と明星とをよしとした清少納言も、夜這い星だけはなければよかったと言っている。後々まで、女は夜這い星を見ると、ねずみ鳴きをしてまじないをしたともいうが、東京の下町では、さして問題にしていなかった。むしろ夏の夜はそとに出て流星を見ようと、自分に向つてとん

で来るのを、喜んでさえいる。

星についてはわからないことが多い。

風

「かぜ」という日本語の意味するものは、少なくとも三つある。風と風邪と、もう一つ特殊な風とである。

風邪という病氣のことは、医学的には解明しきられていないと聞いている。月世界へ行こうという世の中に、風邪というありふれた病氣のために、人間が苦しんでいるのは、なんとなく奇妙なことだが、風邪に限って、いつでも、「こんどの風邪は長い」とか「こんどの風邪はひどく耳に来る」とか、いつでも尋常でない難くせが付くのがふしぎだ。

風邪の意味のかぜは、源氏物語にも出て来て、「風邪ひき歩く」などという文句も見えているが、しかし昔かぜといった病氣には、今の風邪のほかに、風邪とはことなる慢性の病氣をいうのと、また別に下痢を指していつている場合とがあるという。治療のきめ手がないように、物語類にあらわれてくる病氣のかぜにも、諸説があるのである。

旧和名抄が天地の部、風雨の類に分類している風は、ありふれた、天然現象としての風であるが、それは人間の生活と特に関係が深かったから、風の名の方言はさまざまであつて、日本の民俗学の、大事な一分野をなしているほどである。

追い風^てという、順風のこと、船にとつてはありがたい風で、「追いてに帆かけてシュラシユシュ」^ユと陽気だが、もう一つ「追い風^{かぜ}」には、別の意味がある。匂いの高い木の間を吹いて来て、ほんのりと、いい匂いを感じさせる風だ。風は、それにいい匂いをのせて、送り届けて来てくれるのである。それはさらに微細になつて来て、人が通つたあとにおこる空氣の動揺をも「追い風」と言っている。平安朝の貴族たちは、衣服に薫香をたきしめたから、その追い風は、とくにいい匂いだったろうし、人によつては独特の、家に伝わる有名な香を使つたから、その追い風で、今のは誰であるか、ということもわかつたのである。

「東風吹かば匂いおこせよ」と、菅原道真は庭前の梅に語りかけた。西の太宰府にいる主人の処まで、匂いを風に托して送つて来いというのだが、その辺から、風の神秘性がどこかにひそんでいることを思う必要がでてくる。つまり、風には変な風がもう一つあるのである。

風がもの言や、ことづてしようもの。

風は諸国を吹き廻る。